

市町村教委（上伊那地区）と県教委との懇談会【概要】

1 日 時 平成 23 年 7 月 19 日（火） 13:30~16:00

2 場 所 伊那合同庁舎 講堂

3 協議事項

(1) 中学校 30 人規模学級編制について

【県教委】

中学校へ 30 人規模学級を導入した。対象校のおよそ 3 分の 2 でいろいろ時期が迫っていたために、無理をお願いしながら導入していただいた。しかし、残りの 3 分の 1、24 校については、導入する事が出来なかった。理由として一番多かったのは、担任に充てる教員の目途が立たないことであった。後、次年度以降、継続してやれるかどうか。或いは教室の施設設備面であったり、少人数を選択したい希望であったりと様々あった。

それを踏まえて、今年は、是非早い時期に、10 月とか、或いは、11 月議会辺りに知事が表明していただければという事でお話をしている。特に財政的の裏付けが国含めてどうなるか分からない事もあり、非常に厳しい環境だが、今、前提となる考え方 3 つ、それから A 案、B 案、主に A 案で提案した。

【市町村教委】

現在の 1 年生が、30 人規模学級で、来年その生徒が 2 年になった時に、元へ戻すという事は出来ない、そういう施策は成り立たないと思っている。そうすると、2 年になる財源はどこから持ってくるかという事で今お話にあったように、少人数の方から、或いはこまやかプランの方から持ってくる事であるが、一つは、少人数なり、こまやかプランが既に各学校の中に位置づいて、ある意味、当然の事のようになっているのを無くす、削減するので、かなりの負担が考えられる。

もう一つは、学習習慣形成の小学校 1、2、大規模校で削減、或いは不登校全学年を一部非常勤化する事である。自分の学校に直接、30 人規模学級という恩恵が関わって来ない学校も、その事に協力をしていかなければいけない。そうすると、もう少し抽象的な数ではなく、上伊那での説明なので、辰野中学から中川中学までの各学校がどうなって、それを支えていく小学校の配置数がどうなっていくか、その具体的な学校毎の数字が示されなければ、委員長も教育長も、と言えない。総論では分かるが、具体的に自分達の市町村教委にどうそれが及んでくるか見えないと判断が非常に困る。

【市町村教委】

昨年度末に M 中学でも導入を考えたが、当然、いろいろな諸条件で、まず出たのが教員の確保。正規教員に近い方がどのくらいいるのか。それを各学校長が探さなければならない。実際にはあの時期では、ほとんど不可能に近い状況である。中学は教科が大事になるので、小学校のように空いている先生どうぞというわけにもいかない。どうしてもそういうことから導入に踏み切れない。だから教員の確保という事は、来年どうするのか、中学になって 7 学級にして、2 年生になった時に 6 学級という事は学校が荒れる原因なので、とてもできないと見送った。そういった点で、早期にその方向が示されれば、私共も中学校とタイアップをしながら導入について、検討していきたい。

【県教委】

話があったとおり、個別具体的に数値が示せる時期を当然示して、やりとり含めてさせていただかなければいけない。

ただ、こういう苦しい提案をしているのは、事業を聖域なくマイナスシーリングをかけた上で予算編成にかかっている、また、来年度の国の概算要求が見えてない状況なので、分かり次第、明らかにしなければいけないご指摘だと考えている。

人の確保が一番大きな課題であるので、仮に9月、或いは11月議会で知事が表明してくれれば、ご指摘の問題は解決出来るのではないかと考えている。

【市町村教委】

限られた予算の中で、効率良く子ども達の学力、或いは元気よく学校へ来てもらう立場から当初、30人規模学級が、今まで職員にとってどうであるかという事で見えて来なかった。そんな点から是非、今日、お示しいただいた追加資料の少人数学級における指導のところへ目を付けていただいたのは一つの大きな示唆に富んだ資料ではないかと、ただし、少人数指導をしてきて、成果や課題が明確でない。資料で、効果が期待できるという35人規模以下に該当すると思うが、これを少人数学級でやってきたと捉えて、そうするとその部分をもう少しクローズアップして少人数で行けばこれだけ効果がある事で、かつて英語、数学で少人数指導をしてきた学校で、現実に余り成果が上がってきてない。50億のお金をかけながら、成果が上がってない。過去に少人数でこういう手立てをやってきたが、実数の成果としては上がっていない事をもっと出して良いのではないかと。同時に新しい視点で、小学校の学習習慣形成は非常に大事だと思う。小学校の少人数指導、本当に成果が上がっているのかどうかデータをお持ちなのかどうか。先生方、学校の都合の良いようにあるのではないかと私はどうしても思っている。この辺は思い切ってやっても良いのではないかと。そういう点から中学をもっと充実するこの方向がある面では大事にしている。

【市町村教委】

当市では、T中学校が該当した。35人規模学級にするか、或いは今まで通りなのか、校長から相談があった時に、私は基本的に30人規模学級でやると思っていたが、一番のネックは担任でした。もう一クラス増やすのは難しい、学校の改築中であり、教室の事もあったが、一番の弊害はそこである。

私は、こまやかプランで、特に中学校においては効果があったかどうか、学校訪問をしてみても塾の延長みたいな事で授業として成り立っているのかどうか。そういう面で考えると、40人から35人以下の学級にして、良い学習集団を作ることが最終的には授業の質を上げ、英語や数学の力も伸ばす事になるし、不登校の問題も良い学級集団を作らなければいけないと、生活集団、学級集団を安定させ、質を高めるというこれが一番、学校教育の柱になると思う。

単に英語と数学の時間だけ、2クラスを3クラスに分けてやったとしても、学校教育の授業になっていくのか前々から疑問に思っていた。ただ、出来れば、こまやかプランでくれるのが当然という考え方の校長が多くて、こうなった場合に、その不足は市で何とかしてくれるかという質問が堂々と出てくる状況である。確かに教員の数が多い、出来るだけそこに関わる先生の数を増やしたいと私も思っているが、一クラスの人数を減らすこの方向を進めていただくと同時に、こまやかプランも出来るだけ維持できる、必要な部分は何とか付けていただく事で進めていただきたい。

【県教委】

今年踏み切った学校は元には戻れない。是非、来年も継続と、やはり生活集団、基礎集団を作って、1年かけて実践していただいている訳ですが、それが1年経ったらもう1回クラス編成して40人の規模に戻るという理屈は、なかなか保護者にしても生徒自身にしても、或いは、担任と生徒の皆さんの関係においてもなかなか納得し難いものがある。その意味で私どもは学年進行で一挙に3年間やりたい基本的な線は変わらない。

変わらないので、特に導入した学校からはそういった声を強く受けていると受け止めさせていたいただきたい。また、少人数について、少人数学習集団編成事業、特に、中学校の英語や数学が果たしてその通りの趣旨に沿ったような編成が行われて、効果的であったのは非常に難しい部分もある。基礎学習集団を安定させて、子ども達同士はもちろんだが、教師と子ども達、或いはそれを見守っていただく保護者の信頼関係を築き上げてきた、それを基に学習とか生活指導とかにエネルギーを傾注していく。これが極めて重要である声はいくつも聞いている。今年導入した学校でそういう事が、10人ほど減ただけで、こんなにも違う事をいくつもお聞きしている。それもあり、私ども手応えを感じているので何とかその方向でやっていきたい。

【市町村教委】

A中ですが、ギリギリのところ学級の再編成を7学級から8学級に直した。やはり、一番心配だったのは1年終わったところで、再編成で元に戻るの大変困る。最後、首長と談判して、万が一元に戻ったら単費で出すしかないときりぎりまで検討して8学級にさせていただいた。後戻り出来ない。学級編成がこのまま3年間で行くという事で納得していただいて35人学級としていただいた。今、3年生が39名、2年生40名、1年生は31名。全く雰囲気が違う。特に先生が机間指導して回れる、机の後ろに空きがあり、保護者が参観日に入れる状況になり、全く違う。単に景色だけの問題だけでなく、1年の担任は、子ども達が落ち着いて話を聞いている。出てないが、いわゆる中1ギャップからくる不登校の数は減っている気がする。本当に効果が大きいので是非、拡大していただきたい。

【市町村教委】

先日、教育委員会を行って、不登校のこの1年間の総括を行ったが、その中で大規模校であったので、どうしても小学校6年から中1へ行った時に不登校生徒が増えていたが、現時点で本年度、1人もいない報告を受けてこれは大きな事だと実感した。

参観をすると、今までの教室は40名いるので、B5の昔の教科書に対応した生徒の机しか入っていない。もう一つ、今、規模が小さい学校の方はA4判に対応した大きな机でもって授業を受けている。40人から31人になった事で教室の中に子ども達の大きくなった教科書がズレ落ちない大きさの机を入れる事も可能になった。まだまだ、検証をこれからなので、良い点、悪い点沢山出てくると思うが、現状、教育委員会に報告があったところでみると、概ねありがたいと捉えている。

【市町村教委】

T中学校が今年踏み切らせていただいた。ただ、一学級増えたのに、専科連動が無くて担任が1人増えただけ、後は少人数学級から持ってきていただきたいとの事だったので、持ち時間数は決して得になっていない。むしろきつくなっている。それを承知の上で導入したが、基本は一クラスの人数を減らす事できめ細やかな指導に入れるのではないかと踏み切らせていただいた。いずれにしても来年これを40人にもう1回戻す事は、非常に苦しいので、何としても踏み切ったところは何とか続けていただきたい。

効果について、まだ、1学期済んだだけなので、これから先の事は分からないが、先生方の話を聞くと指導には手が入って非常にはやりやすいと聞いている。不登校の数とかはどうか分からないが、今のところは例年よりは少なくても良いかと思っている。

また、文科省では、来年度小学校2年までと中学校1年も検討していくと報道されていた。同時に2学年分、余分になると国で決まった場合、県はどう進めて行く予定か。

【市町村教委】

2月に県教委の主幹から電話が来た。早速、中学の校長と相談をした。県では並々ならぬ覚悟でこの新しいプランを出してきた。それに答えるべく最後の努力をしてみたいと、校長の姿勢であった。私は職員ときちんと話をしなさいと、職員の方で受け入れる体制を作らない以上、この制度は生きないと指示を与えた。

同時に村長へ飛び飛び込んだ。もし、この事案が1年で終わる事があったら、教育村と言われている当村で単費職員を雇えないのは大変だと話したところ、村長は県教育長がそれだけの事を言っているからやらない事はない、そうなったら俺も文句を言うと、意見をいただき、強い援軍を得た。

教育県長野で、もし1年でこれがつぶれてしまったら、これはもう長野県教育はどこかに飛んでしまう、そのくらいの覚悟を決めてこれからも県教育長と折衝をしたいと考えている。非常に好評であり、授業を見に行っても隙々としていて、先生による机間指導もきちんと出来るし、父兄の参観にも父兄が全員教室へ入るとこれは有難い事だと思っている。よろしくお願ひしたい。

【県教委】

今、ご指摘いただいた点、非常に好感を持ってスタートされた事で大変有難い。阿部知事は30人規模学級になったから、即、そのまま教育の効果が出てくるとは信用出来ないと言っている。入れる事によって、職員の気持ち、校長の学校全体に対するマネジメント、或いは、教委の皆さん、関係者がこういう風にやっぺいこうと気持ちが変わる事が非常に大事である。

そこで、このことによって、例えば、学力がこう上がったというのはなかなか実証が難しいと思うが、担任が生活ノートをハンコで済ましていたが1行書くようになった、或いは1行が3行になったとか、或いは生徒の相談回数が1週間にこれだけ増えたとか、或いは、家庭学習の宿題をちゃんと点検して帰す事が出来るようになったとか、或いは、保護者からこういう声が上がっているが、学級通信等に載るようになったなど様々な指標、姿を示すものを是非、上げていただきたい。学力の数値で示せるものがあれば一番強いが、それだけでとは決して考えていないので、生活の基礎集団である学級づくり、そこにおける生徒間の人間関係、対教師、对学校全体に対する人間関係がどうなったかが一番のポイントであるので、是非、そのような声をお願ひしたい。

【市町村教委】

基本的には中学校30人規模学級の方は賛成。是非、進めて行っていただきたいと思っている。当村は直ぐ恩恵を受けられるかと言うと恩恵を受ける状況にない。そこまで人数が多くないので、そういう事になってもまだ、学級の人数が少ない状況。何年か後のうちには恩恵が受けられると期待している。

今までの話だと、大規模の学校のいろんな課題を何とか解消しようと30人規模学級、少人数学習が考えられてきている。大きな流れはそうかと思うが、そこに当てはまらない小規模な学校においても課題を持っている。不登校対策で急きょ加配を最後に付けていただいて大変ありがたいと思っている。今年はその成果があり、不登校を未然に防ぐ

事を大事にして、現在のところ昨年に比べれば不登校は減ってきていてありがたい。基本的には、大規模を小規模に持っていく流れは良いが、30人規模学級、少人数学習も関係しない人数の小さいところでも課題がある事で、こまやかプラン辺りでそれに対応出来る部分も是非、残して欲しい。

【市町村教委】

30人規模学級、私は、否定するものではないし、来年、1年生が当町該当するので、是非、続けていただきたい。もう一点、少人数学習の成果、検証が不十分であったが故に、財源をそちらから取り崩していく認識は是非、持たないでいただきたい。確かに少人数学習の成果の検証は不十分だったと思うが、それは、当初少人数学習がスタートした時に、非常に担任から抵抗があった。やむなく、決して能力別にするものではないというスタートであった。しかし、少人数学習のもう一方の狙いとしては、伸びる子は更に伸ばすというのが目標だったと受け止めている。従って、少人数学習が始まって、10年以上経過しているが、小学校でも運用をもう少し、学校現場でその子どもに合わせたシステム、少人数学習の効果があるような、これは私ども市町村教委の指導と現場の校長のリーダーシップだと思うが、そういう運用においても成果が上がると私は思っているので是非、30人規模学級の補てんのために少人数学習を削減が相応しいとか、或いは、効果があるところには引き続き、手を差し伸べていく。特に小規模学校はやっていただきたい。

【県教委】

小規模校への加配と、各学校には各学校への課題等があって、そういうものは私達も大事にしていきたいと思っている。ただ、今まであれもこれもといっぱいあったので、それを精査する必要は出てくると思っている。例えば、不登校等は、提案公募であるので、どこの学校に配置するかは人数で決まるわけではないので、そういうものをもっと有効に使っていく事もあり得ると思っている。こまやかであれば、教育課題対応をどのように使うか各学校の校長がマネジメント等していただく、これも減ってきている。名前の活用方法選択型が段々、活用方法が選択になって来ないところがある。是非、学校現場でどんな風に使っていくかを広めていただきたいと思っている。

少人数学習ですが、英語の場合は、特性から少人数学級化していく方が多く、習熟の程度に応じたのは非常に少ないのが各学校の取組み、3年になって一部、習熟の程度に応じたのがあるくらい。数学も1年生当初は少人数学級化で学習習慣を付けて、それから単元に応じて習熟度になってくると思う。ただ、習熟をやっていたから、伸びる子は伸びたというデータはなかなか上がってきていない状況。各学校で少人数学習をまず取り入れて、学級を解体していく事は30人規模学級になっても十分できると思っている。

(2) 学力・体力の向上について

【県教委】

今年の学力向上プログラム 2600万円余の予算ですが、是非、十二分な活用をお願いしたい。

体力に関して、M小学校中学校の例だが、子ども達が毎日調査をしたところ、3千歩、全国平均は1万歩。中山間地の子どもよりも都市部の子どもの方が歩道橋、地下鉄など、歩く階数が多いのではないかと。日常生活の中で、家庭の中でお手伝いや農作業は無くなってしまったし、それからスクールバスや買い物も自分の家の車で行くとなるとなかなか機会がない。実態を知って初めて初めて真っ青になって、ここからスタートした。

学力、或いは体力の実態をどう掴んで、どういう認識をしているかがベースになると思う。授業改善をどんな風に考えたか。学習面では家庭学習との繋がりをどう工夫したか、或いは、体力では学校の遊び、体育と地域の育成会とか家庭でのお手伝いとか、そういったものがどう関連性において子どもの姿はどうなっているかといった発想。それから学校の研究体制、指導体制が校長のマネージメントを含めてどうなっているか。それから教委としての取組みが学力も体力も共通のポイントになると思っている。

【市町村教委】

学力向上について、一番は日々の授業だと思う。最終的にはいかに課題意識を持たせるか。それをいかに持たせるか工夫するのが教師の力量、教師の仕事。それを持てば、子ども達は自然に追求を始める。

ノーテレビ、ノーゲーム。これは当市の場合は、各学校主体で進める事で取り組んでいる。何とか解決する方法、これが学力や体力全てに通じて行くと思うので、良い方法があれば教えていただきたい。

【市町村教委】

子ども達の笑顔が映える町であって欲しいと考えている。そのためには、一番大事なのは授業の時間ではないか。学力面で自身を持って欲しい。この時期になって、中学3年生の部活が終わって、ようやく学力テストが始まる。最近、この2点お話しする。

1点目、500点満点でテストを繰り返すが100点を取れない子が何人もいる、学校はそれをほっといて良いのかと言われ、とてもショックであった。それについては、学校の先生に時間を取っていただき、個別指導をお願いしたいと思った。学校地域支援本部事業に変わるものとして、放課後、学習支援のためのボランティアの募集をしようと今年80万の予算を確保して、学習支援のボランティアの募集を初めている。

2点目、子ども達に何で勉強する必要があるのかと言っている。キャリア教育にも繋がるような学習する事の意味から押さえていかなければいけないと考えている。

【市町村教委】

学力向上について、小中連携学力向上推進事業が県であった。これを3年間受けた。数学については、中学に配置された先生が小学校へ行って、算数の授業をする事業である。3年間で数学が上がりました。この事業終わってしまったのは残念だと思っている。その後、小中の連携と一緒に中高の連携もやろうという事になり、先生方が授業交換をやっている。

学校支援地域本部事業もあるが、授業の中に入れていただく事で、ある小学校においては、サタデースクールをやって、土曜日に希望者が来て、地域のボランティアに見てもらいながら勉強する事業をやっている。また、小中一貫教育という事で本年度から本格的に始めているところもあり、これも学力向上の成果期待される場所である。

【市町村教委】

昨年の成人式に私どもが中学にいた子ども達が来た。その時に印象に残った言葉が、M中学は楽しかった。部活も楽しかったし、本当に良い生活を送ったが、今となって一番思うのは、あの時に中学の先生達が、特に数学・英語の先生が、必死になって私に教えてくれた。それを今、非常に感謝している。

首長にお願いして学校も活力上げるにはお金が必要だと、首長が3年前に中学校へ100万円、自由に使う予算を確保していただいた。飲食に使うわけではないが、学力向上が8割くらい、残りが職員研修、不登校対策という事で、使途については会計報告が

きちんと出れば良い事で、昨年度から自作の数学と英語のドリルを1年分印刷した。毎朝、それをやろうと中学でやっている。

もう一つ、超難関校の大学へM中の生徒が入る。もちろん高校の先生の努力はある。その子ども達があんな先輩が〇〇大学に入ったと、俺ももしかしたら入れるかと思って努力したら入っちゃった。これはごく少数だと思うが、身近な人が難関校に入るのも自分の励みになる子ども達もいる。そういう事が一つのきっかけになる。

運動あそびについて、H18から導入した。保育園へ全部入れて、検証という事で保育園の子どもが小学校1年になった時に、専門の先生にも来ていただいて、町の指導者達も行って、全小学校先生を対象に講習会をした。一番びっくりしたのは、1年生は保育園からやってきている。2年生は全くやっていない。その子ども達2人を比べて同じ運動させたが、全く違う。もう一つはケガが少なくなる。誰が見ても成果があると自身を持って言える。

【市町村教委】

学力向上は仮説を持っており、学級に所属感や満足感を持っていない子どもは勉強どころではない。QUテストを侵害されている子ども、或いは承認されていない子ども達のグループは学力が伴わない仮説でNRT調査を実施した。昨年、検証して一定程度の相関はある仮説が、直線的な相関ではないが得られた。

その子達の学級の所属感、満足感を得られるような生徒指導上の指導をする両面、個別学習を支援する事が全体的な底上げになるのではないかと思っている。従って、QUとNRTのテストバッテリーを今後は、小学校へも拡大していくように考えている。

【市町村教委】

改めて、子ども達の1日を表にして見た。朝の8時15分から読書、25分からは漢字のドリル、最後、帰りは家庭の学習をと宿題を出す。子ども達があんまりがらめになっている状況で、これも学力向上の善悪の悪の方ではないかと思う。もう少しゆとりを持って考えている。4月に3人の校長に来てもらい、学校の実情と個々の課題を伝えた。7月の下旬にもう一度、校長会を行うので、1学期末の反省を持ってきていただきたい。それを見ながら、3校で小中が上手くドッキング出来るように、11月には小中の連携旬間を作り、そこで小学校の教師が、中学校へ行って授業を見たり、実際にやったりする予定である。

体力向上については、総合型地域スポーツクラブがあり、そこで大分鍛えられて、個人の力は良いものを出していると思う反面、どの学校の大会に出てもどこかが弱いというのが課題である。

【市町村教委】

先生方の指導力向上を大事に考えて、小中3校研修会を設けて、遅まきながら、小中連携を含めて、お互いの授業を見合っ、研究会等を持って、まずは、小中の理解から始まって、授業の交換とか交流まで持って行きたい。その事が不登校の改善にもなると思って始めたところである。

【市町村教委】

職員には、当村にいる時は当村の公務員。従って、村の教育方針を十分、具現するようお願いしたい。校長は、4月に自分がこれからどういう学校にしようかというものを書くが、他の市町村へ行っても通用するような標記では困る。何をいつ、どの程度、どこまで、これを明確に書いていただきたい。その事を校長が職員と面談する場合も同

様に具体的な目標を持って学級経営、学校経営に当たっていただくようお願いしている。

また、学力向上を考えた場合に、今、一つ研究している事が、県でも研究していただきたいが、例えば、土曜学校を東京都では、20%がやっている。埼玉県でもやっている。問題は、手当の問題が出てくる。高等学校は、長野県の場合でも多くの学校で土曜日に授業をやっている。研究開発的な事が市町村でも取り組む場合に、是非、市町村でも人を付けたいと覚悟しているが、県版の研究開発等に対する支援などを考えていただきたい。また、同時に小中全て一貫校研究推進とこんな事を思い切って先生方に夢を持ちながら取り組んでいただく方向を、ある面では支援を思い切ってやるのも一つの方法ではないかと思っている。

【県教委】

今、発表いただいた中で、学力でモチベーションを高めるか、或いは、低位生をどうするかと、これは長野県でも大きい課題になってきている。全国学テでは低位生の状態はさほど悪い状態では無いが、学力検査でいくと、明らかにふたこぶラクダになったり台形状になったりと、これが低位生が少なく、上位層が少ない。つまり伸びる力を伸ばし切っていない。或いは、基礎調査で言われるが自分の学習と将来の自分がなかなか結びついていかない、キャリア教育の重要性はご指摘があった。学習を巡る本質的な課題は長野県も同じであると感じている。

体力については、先進的な事例をご紹介したので、長野県の場合は体を動かしていない、どうやって体を動かすか、固い体をほぐしてやる。ほぐしてやる事で相当子ども達が変わると言われている。それから、やさしい運動から難しい運動に挑戦させる事によって、我慢するとか、挑戦するとか、高まろうとする気持ちとか、或いは、スポーツや遊びを通してた集団プレーの中で社会性を身につけるとか、それから先生方の目的意識的な指導が非常に付いている。いろんな意味で先進的事例に学びたい。

【県教委】

私は、教育委員として、企業経営という立場でやらせていただいている。不登校の問題も高校再編の問題も30人規模学級編制の問題にしても、学力・体力にしてもいずれにしても、今、置かれた現状については、大変厳しい財政状況の中でやり繰りをしながら進めていかなければならない。

しかし、教育は大事な問題であって、我々企業経営にも必ず、ツケが回ってくる。その事が結果的に国の力に繋がっていく大変重要な問題である。そういう意味から今日は貴重なご意見を拝聴する事が出来た。教委の性格上、私一人では何も出来るものではないが、委員長、教育長以下しっかりと受け止めさせていただいて、少しでも皆様方のご要望が実現出来るように頑張ってみる。引き続き、ご提言を頂戴出来て、将来を担う子ども達が本当に輝いて、この長野県から巣立ったと言って自慢できるように是非、先生方のご指導をいただければ大変有難い。今後ともご指導、ご協力をお願いしたい。

(終了)